

福島県立会津短大 佐川 澄子

1. 木綿単衣地の縫製について、常にその手法として用いられる、並縫、三つ折ぐけ、耳ぐけの3手法を取上げ、この方法で縫製後、洗たくを繰返して、布地別、縫糸別による縫目の収縮率の実態を把握しようとした。

2. 試料布は木綿浴衣地と白縞の2種。縫糸は木綿三子糸、カタン30番の2種である。これらを用いて、並縫、三つ折ぐけ、耳ぐけを基準に合わせて縫製し、洗たくを繰返して、その都度乾燥時の原布と比較し、これを5回反復して、繰返しのある三元配置法によって処理した。

3. 布地の収縮率は白縞>浴衣地の順であり、縫い方では並縫>三つ折ぐけ>耳ぐけの順序である。その洗たくの回数間の最高収縮率を示したのは第5回目で6回目は下降を示した。分散分析の結果は、縫い方、布地、洗たく間並びに布地×洗たく、縫い方×布地×洗たく間にいずれも1%の有意水準の差が認められた。

洗たくによる縫糸の収縮率ではカタン30番>三子糸であり、縫い方では三つ折ぐけ>並縫>耳ぐけであった。その洗たくの回数間の最高収縮率を示したのは第1回

であり、4回以降は下降を示した。分散分析の結果は、縫い方、縫い糸、洗たく並びに縫い方×縫い糸間にいずれも1%の有意水準の差が認められた。